

## 保育士養成課程に在籍する学生の職業認知が 保育者効力感に及ぼす影響

小河 妙子\*・長屋 佐和子

### Relationship between Occupational Cognition and Pre-school Teacher Efficacy for Students in a Training Course of Nursery Teachers

Taeko OGAWA\*\* and Sawako NAGAYA

近年、夫婦共働きや女性の社会進出などの社会情勢の変化に伴い、幼児教育や保育サービスの充実が求められている。そのため、保育の現場で働く保育士の専門性および質の向上に対する社会的要請も高まっている。このような変化に呼応し、保育士養成校における学生の教育においても、保育の現場で様々な場面に対応できる、高度な専門性やスキルを持った質の高い保育士の育成が求められている。このような状況から、保育士養成校における教育課程では、専門的知識を学ぶ講義科目に加えて、多様な体験学習を伴う実践的な実習カリキュラムが整備されている。

その中でも、保育士養成課程に在籍する学生にとって、保育実習および教育実習（以降、実習と呼ぶ）は、教育課程において自身の目指す職業についての理解を深め、適性を見極め、将来にわたって保育士として継続的に働くための様々な知識やスキルを身につける貴重な機会であると位置づけられる。一方で、実習は、日常の学生生活とは異なり、大きな責任を伴う保育現場において、実習先の園の職員や幼児達との人間関係を短期間で形成し、保育に関する様々な専門スキルを身につけ業務をこなしていかなければならないため、大きなストレスを受ける状況でもある。実習期間中のこのような状況において、実習生が精神的健康を維持することが困難になることもあることが知られている（野崎, 2007, 2013; 小河・長屋, 2014）。

このような背景から、保育士養成課程に在籍する学生を対象とした実習教育に関する心理学的観点からの先行研究が多数報告されてきた（浜崎・加藤・寺菌・荒木・岡本, 2008; 早坂・有馬, 2009; 本多・櫻井, 2011; 森, 2003; 森野・飯牟礼・浜崎・岡本・吉田, 2011）。そのなかで、“保育者効力感”は特に重要な概念として注目されてきた。保育者効力感とは、“保育場面において子どもの望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念”と定義される（三木・桜井, 1998）。

保育者効力感に関する研究は、保育者の保育能力に関する要因としてBandura (1977) の自己効力 (self-efficacy) に関する理論をもとに発展してきた（早坂・有馬, 2009; 井上, 2014; 桐村・岡本・森田, 2010; 今野, 2009; 前田・金丸・畑田, 2009; 森野他, 2011; 西坂, 2002; 西山, 2006; 野崎, 2013; 田頭, 2012）。人は何らかの課題を行うときに、自分にできそうか否かを考えながら取り組む。課題を達成できそうであるという期待が達成への動機づけに影響する。そして、この期待は大きく2つに分けることができる。一つは、自分がある目標

\* 所属：東海学院大学、\*\* Tokai Gakuin University

達成のために行動できるという確信であり、効力期待 (efficacy expectation) と呼ばれる。もう一つは、ある行動を行ったときに、目標となる結果が得られるかどうかという評価であり、結果期待 (outcome expectation) と呼ばれる。Banduraは、個人によって知覚された効力期待を自己効力とよび、達成場面における自己効力の重要性を指摘している。

三木・桜井 (1998) は、この自己効力感をもとに発展された教師効力感に注目した研究を踏まえて、保育者効力感に関する研究を報告している。教師効力感とは、子どもの学習に望ましい変化を与えることが出来るという信念であるとされる。彼らは、教師効力感の概念をもとに、保育の独自性を考慮した保育者効力感尺度を作成した。

三木・桜井 (1998) によれば、実習は、Bandura (1977) の指摘する自己効力感に影響を及ぼす4つの情報源、つまり行為的情報、代理的情報、言語的説得の情報および生理的喚起の情報のうち、主に行為的情報と代理的情報を提供すると考えられる。実習生は、実際に実習において幼児の保育を経験することによって行為的情報を得ることができ、また現場の保育者や他の実習生の行為を観察することによって代理的情報を得ることができる。彼らは、保育専攻短期大学生を対象に、実習の前後で保育者効力感がどのように変化するかを検討した結果、実習を経験することで学生の保育者効力感が高まり、また実習先の園との合致感が高い実習生が低い実習生よりも保育者効力感が高まることを明らかにした。これらの結果は、実習での経験が、学生の保育者としての自信を高め、自己効力感を増大させる効果をもつことを示唆している。

一方で、実習経験が保育者効力感を高めるという結果に対して、実習経験や学年が進むに伴い保育者効力感が変化し、2年生よりも1年生において保育者効力感が高く、入学後に保育者効力感はいったん下降し、その後にもう一度上昇するという結果も報告されている (石川, 2003)。つまり、たんに実習を経験することで保育者効力感が高まるわけではなく、入学した直後の頃には学生は漠然とした夢や希望を抱くことによって高い保育者効力感を持っているが、入学後に学習が進み、実習を経験することで、自分の能力や保育職の現実を認識し、いったん保育者効力感が低下するという結果も報告されている。

以上のように保育者効力感を高め維持することは、保育士を目指す学生にとって重要な問題であるだけでなく、現職の保育士においても重要な問題であることが指摘されている (西坂, 2002; 田頭, 2012)。保育所への入所希望の増加傾向が続いている現在、待機児童問題の解消が急務となっている。田頭 (2012) によれば、現在、保育士の有資格者は約100万人を超えるが、実際に保育所で働く保育士は約35万人であると報告されている。保育士資格を持ちながら就業していない潜在保育士が多数存在しており、職場環境に関する離職理由として、“人間関係”や“雇用条件に不満”といった理由が多く挙げられている。保育士の数が足りない多忙な保育現場において、同僚の保育士や保護者との対人関係などを理由としたストレスも加わり、保育士として新規に採用されてから2～3年で退職する者も少なくないのが現状である。このような問題から、保育士を対象とした研究では、保育者効力感と離職動機との関連性や (田頭, 2012)、子どもに対する理解や対応の困難さ、学級経営の困難さを感じるなどのストレスとの関連性が検討されている (西坂, 2002)。

例えば、田頭 (2012) は、保育者効力感の低い保育士ほど離職動機を持ちやすいことを報告している。この研究では、卒業後6年を経た保育士が調査の対象とされ、保育者効力感が測定された。その結果、保育者効力感の高い人ほど離職動機を持ちにくいことが示された。より詳細には、保育者効力感が高い群では、職場・待遇への不満や心身の疲れが、仕事への迷い、職場の人間関係・雰囲気、および仕事の成果・充実感の喪失よりも、大きな離職動機になること

がわかった。一方、保育者効力感が低い群では、離職動機の間には明確な差異は認められなかった。

また、西坂(2002)は、幼稚園教諭の精神的健康に対するストレスの影響およびストレスへの個人特性の影響について検討を加えている。この研究では、ストレス評価、精神的健康、保育者効力感、およびハーディネス(コミットメント、コントロール、チャレンジの総体)が質問紙尺度によって測定された。その結果、園内の人間関係および仕事の多さと時間の欠如をストレスとして知覚することが精神的健康に影響することが明らかにされた。個人特性としてのハーディネスが園内の人間関係や仕事の多さ、子ども理解・対応の難しさや学級経営の難しさといったストレスを軽減し、精神的健康を維持する要因であることが明らかにされた。

以上のように、保育士を目指す学生にとってだけでなく、現役の保育士においても、保育士としての経験を積み、長期に渡って現場での仕事を継続していくためには、保育者効力感を高め維持することが重要である。よって、保育者効力感を高める規定因が明らかになれば、保育士養成校における学生の教育カリキュラムや新人保育士のキャリア形成における研修プログラムなどに応用していくことが可能となると考えられる。

このような背景から、保育者効力感を高める要因として、本研究では職業認知に注目した。保育士養成校に入学する学生は、大学入学時に、すでに自分の将来の職業として保育士を選択している。つまり、保育士という職業に関して何らかの理解をし、自分の将来の職業として相応しいあるいは保育士になるのが夢であるという学ぶ目的が明確である点が、職業選択をせずに大学に入学する学生とは異なる特徴である。

西山・富田・田爪(2007)は、保育士養成課程学生における職業認知について、自我同一性および保育職に関する理解が保育職への適性感を規定する要因であることを報告している。そして、保育職への適性感の高まりが充実感・満足感の予期や関心・意欲、保育職へのコミットメントへと繋がることを明らかにしている。

西山らの一連の研究(2006,2007)では、短期大学に通う1年生(入学期)および2年生(卒業期)を対象として、自我同一性が職業への適性感や将来の予期に影響を与え、さらに関心や意欲に通じて、職業へのコミットメントや人生における職業の占有状況に影響するというプロセスを想定した因果モデルが検討されている。

その結果、“保育職への適性感”が職業認知に関わる様々な変数に正の影響を及ぼし、“充実感・満足感の予期”といった将来の見通しや、“関心・意欲”といった動機づけの側面、さらに“保育職へのコミットメント”、“継続の意思・ウエイト”に影響することが明らかになっている。さらに、“保育職の理解”を追加した検討も加えられている。職業認知とは、職業への適性、将来の職業生活への予期、関心や興味などを広く含む職業の捉え方の総体であるとされ、“保育職への適性感”が職業認知の始発となり、“充実感・満足感の予期”、“関心・意欲”、“保育職へのコミットメント”に繋がる。さらに、“関心・興味”が高まることで、行動レベルでの“保育職へのコミットメント”、“継続の意思・ウエイト”が増大し、そして適性感を強く規定する要因として、“同一性の感覚”、“保育職の理解”があることが示唆された。

西山他(2012)では、さらに2年進級時を対象とした調査が実施された。その結果、“保育職への適性感”が職業認知に関わる様々な変数を強く規定することが示唆されている。このような職業認知の知見に基づくと、保育職への理解や適性感を高めることが保育士養成課程での教育において重要であるといえる。

そこで本研究では、学生の職業認知に着目し、保育職への理解や適性感などの職業認知に関わる要因が保育者効力感を高めるか否かについて検討することを目的とした。本研究では、3

回目の実習を終えた直後の3年生の学生を対象とし、保育者効力感を高める要因を明らかにするための質問紙調査を実施した。

## 方法

**調査対象者** 四年制大学で保育士養成課程に在籍し、調査の直前に幼稚園で4週間の実習を終えた3年生の女子学生122名(平均20.9歳、標準偏差(Standard Deviation: SD)=0.4)を対象とした。2014年1月に調査を実施した。これらの学生は、今回で3回目の実習を終えた学生であった。

**質問紙** フェイスシートに加え、保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998)および職業認知尺度(西山他, 2007)の2種類の質問紙を実施した(表1を参照)。フェイスシートでは、学年と年齢、および今後の継続的な調査に参加する意思がある場合には連絡先を記入するように求めた。

表1 使用した質問紙における質問項目

質問項目
保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998)
1. 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2. 私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う
3. 私が一所懸命努力しても、登園を嫌がる子どもをなくすことはできないと思う
4. 保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う
5. 私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う
6. 私はクラスの子ども1人1人の性格を理解できると思う
7. 私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは、むずかしいと思う
8. 私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う
9. 私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う
10. 私は、保護者に信頼を得ることができると思う
11. 私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う
12. 私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う
13. 私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
14. 私は、園で子どもに基本的な生活習慣を身に付けさせることはなかなかむずかしいと思う
15. 私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的、物的)に整えることに十分努力ができると思う
職業認知尺度(西山他, 2007)
1. (保育職の理解) 保育という職業を、わたしは理解している
2. (保育職の理解) よき保育者になるために何をすればいいか理解している
3. (保育職の適性感) 保育という職業は、自分の適性に合っている
4. (保育職の適性感) 保育という職業で、自分の能力を活かすことができる
5. (充実感・満足感の予期) 保育という職業によって、充実感を得るだろう
6. (充実感・満足感の予期) 保育という職業によって、満足感を得るだろう
7. (関心・興味) 保育という職業に関心がある
8. (関心・興味) 保育という職業に興味がある
9. (保育職へのコミットメント) 保育者としてやっていくために、いま自分で何かしている
10. (保育職へのコミットメント) 授業以外に、自分で保育に関する本や雑誌、番組をみる

(1) 保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998): 1因子15項目から構成される尺度であった。例えば、“私は子どもにわかりやすく指導することができると思う”、“私はどの年齢の担任に

なっても、うまくやっていけると思う”などの項目が含まれた。

(2) 職業認知尺度 (西山他, 2007): “保育職の理解”, “保育職の適性感”, “充実感・満足感の予期”, “関心・意欲”, “保育職へのコミットメント”, “継続の意思・ウエイト”の6因子から構成され, 各因子に2項目が含まれた。ただし, “継続の意思・ウエイト”のみ評定の方法が他と異なるために, 今回の分析からは除外した。

**手続き** 参加者は教室で冊子が配布され, 口頭と書面で説明を受けた後, フェイスシートおよび各尺度に回答した。保育者効力感尺度では, 各項目が自分自身にどの程度あてはまると思うかについて, “非常にそう思う” (5点) から“ほとんどそう思わない” (1点) の5件法で評定した。同様に, 職業認知尺度は7件法で評定した。

### 結果と考察

保育者効力感尺度は15項目の合計得点を算出し, 職業認知尺度は, 因子ごとに平均得点を算出した。表2は保育者効力感尺度の平均値とSD, および職業認知尺度の因子ごとの平均値とSDを示す。

表2 各因子の平均得点とSD, 信頼性係数 $\alpha$

尺度	平均値	SD	$\alpha$
保育者効力感	46.35	6.59	0.82
職業認知			
保育職の理解	4.42	0.83	0.76
保育職の適性感	4.28	1.24	0.93
充実感・満足感の予期	5.05	1.33	0.95
関心・興味	5.63	1.33	0.98
保育職へのコミットメント	3.99	1.41	0.84

Cronbachの信頼性係数 ( $\alpha$ ) を算出したところ, 保育者効力感尺度では,  $\alpha = .82$  であった。また, 職業認知尺度では, 5因子の各々について $\alpha$ の値は, 保育職の理解 (.76), 保育職の適性感 (.93), 実感・満足感の予期 (.95), 関心・興味 (.98), 保育職へのコミットメント (.84) であり, いずれも妥当な内的整合性が得られた。

保育職に関する学生の職業認知が保育者効力感に及ぼす影響を検討するために, 職業認知5因子の得点を説明変数とし, 保育者効力感の得点を従属変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。図1は重回帰分析の結果を示す。決定係数は $R^2 = .331$ であった ( $F(2, 115) = 29.93, p < .001$ )。

分析の結果, 保育職の理解と保育職の

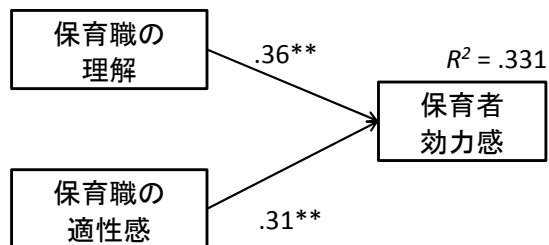


図1 職業認知が保育者効力感に及ぼす影響

適性感の2変数の標準偏回帰係数が有意であった。この結果は、保育職の理解が高いほど、また保育職の適性感が高いほど、保育者効力感が高まることを示す。つまり、学生は自分が保育という職業を理解できており、良い保育者になるために何をすべきか理解できていると感じるほど、また保育士という職業が自分の適性に合致し、自分の能力を活かせる職業であると感じるほど、保育者効力感が高まるといえる。

本研究における質問紙調査は、これまでに3回の実習経験を経た3年生を対象として実施された。これらの学生達は、教育課程においてすでに十分に講義系科目を履修し、実習において自分が遂行すべき課題についての理解も進んでいる状態であると考えられる。実習経験を重ねることで保育の現場において保育職への理解が進み、さらに卒業後に保育士として働くために、学生のうちに自身が取り組むべき課題についての理解が進んでいる学生ほど、保育者効力感が高いと考えられる。また、実習は実践的な体験を伴う学習であるため、保育士としての自分の適性についても認識し、能力を活かせると感じる機会を得ることができる。そのような適性感が高まるほど、保育者効力感も高まることが示唆された。本研究の結果は、職業認知におけるこれら二つの要因を高めることが、保育者効力感を高めるために重要なポイントであることを示す。

今後の課題として、以下の二点が挙げられる。第一に、本研究では実習経験を十分に積んだ学生を対象として調査を行った。これに対して、実習教育が職業認知に及ぼす影響を明確にするには、実習を経験していない、あるいは初めて実習に参加した低学年の学生を対象として、同様の調査による比較検討を行うことが必要だろう。第二に、本研究の結果を受け、保育士養成課程における職業教育では、このような保育という職業に対する学生の理解や適性感を高めることに着眼した取り組みや実習指導を行っていくことが重要となるだろう。

## 引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- 浜崎 隆司・加藤 孝士・寺蘭 さおり・荒木 美代子・岡本 かおり (2008). 保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響——実習評価を媒介した因果モデルの検討—— 鳴門教育大学研究紀要, **23**, 121-127.
- 早坂 正年・有馬 比呂志 (2009). 保育者効力感と対児感情との関連 広島文教女子大学紀要, **44**, 39-44.
- 本多 潤子・櫻井 登世子 (2011). 幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴 田園調布学園大学紀要, **6**, 49-60.
- 井上 祐子 (2014). 保育者効力感に関する研究動向と課題 国際人間学部紀要, **20**, 47-62.
- 石川 隆行 (2003). 保育者を目指す短大生の保育者効力感について 一宮女子短期大学研究報告, **42**, 315-322.
- 桐村 元子・岡本 紗由美・森田 記子 (2010). 常勤保育者と学生の保育者効力感の比較 保育研究, **38**, 19-23.
- 今野 亮 (2009). 保育者効力感に影響を及ぼす要因の検討——属性、関連要因に立脚して—— 国際学院埼玉短期大学研究紀要, **30**, 45-53.
- 前田 直樹・金丸 靖代・畑田 惣一郎 (2009). 保育者効力感、社会的スキル及び職務満足感が保育士の精神的健康に与える影響 九州保健福祉大学研究紀要, **10**, 17-23.
- 三木 知子・桜井 茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, **46**, 203-211.
- 森 知子 (2003). 保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連——保育者養成校における実習教育プログラムをとおして—— 臨床教育心理学研究, **29**, 31-41.
- 森野 美央・飯牟礼 悦子・浜崎 隆司・岡本 かおり・吉田 美奈 (2011). 保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討——保育専攻学生における自信経験・自信喪失経験に着目して—— 保育学研究, **19**, 96-107.

- 西山 修 (2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成 保育学研究, **44**, 150-160.
- 西山 修・富田 昌平・田爪 宏二 (2007). 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造 発達心理学研究, **18**, 196-205.
- 西坂 小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響 教育心理学研究, **50**, 283-290.
- 野崎 秀正 (2007). 保育専攻学生における保育者効力感、実習ストレスと援助要請過程との関連 宮崎女子短期大学紀要, **34**, 87-96.
- 野崎 秀正 (2013). 保育者養成における実習の達成目標と保育者効力感が実習ストレスに及ぼす影響 宮崎学園短期大学紀要, **6**, 69-75.
- 小河 妙子・長屋 佐和子 (2014). 保育士養成課程学生の日常生活スキルが教育実習時のコーピング及びストレス反応に及ぼす影響の検討 東海心理学会第63回大会発表論文集, 19.
- 田頭 伸子 (2012). 保育者効力感が離職動機に及ぼす影響について——保育者養成校卒業生の保育職就労者を対象にした分析—— 広島文化学園短期大学紀要, **45**, 11-16.

